

〈巻頭言〉

異所での体験という刺戟

複眼的日本古代学研究の人材育成プログラム代表

石川 日出志

学部・大学院時代に縄文～弥生時代の考古学を専門としていた私は、ほとんど東日本をフィールドとしており、西日本に出かけることは少なく、ましてや海外に出かけることなど考えてもいなかった。しかし、その後何回か海外を歩いて得た体験は刺戟的で、今から顧みると、研究視野を広げるきっかけになり、あるいは研究に行き詰った時、それまでとは全く異なる角度から物事を考えてみるができるようになったように思う。

博士課程進学が決定した時、指導教授の杉原荘介先生から、九州における弥生土器の成立、西日本の土師器（古墳時代土器）の形成過程、弥生時代青銅器、朝鮮半島の土器・青銅器、中国における農耕起源などの研究を直ちに始めるように言い渡された。私にとっては、ただただ嘖然とするほかない課題要求だった。しかし指導教授の指導（要求？）には、「はい！」か「Yes！」しか選択肢がない時代であり、直ちに実行せざるを得なかった。

ありがたかったのは、先生の資料調査に何回か同行させてもらったことだった。博士課程1年の時、先生のお供をして福岡・佐賀・熊本3県で弥生土器・銅剣・銅鏡・銅鐸鑄型を観察し、実測し、写真撮影をした。明治大学考古学陳列館（現博物館考古学部門の前身）で西日本の弥生土器や銅剣、中国の銅鏡の実物は観察していたものの、発掘されて間もない実物資料を詳細に観察できるのは<モノ>好きな私には幸せに感じられた。また、翌1981年には、6年先輩である福岡市教育委員会の力武卓治さんとともに杉原先生に付き添って韓国を訪問し、ソウル・光州・慶州・釜山で弥生時代に併行する時代の土器や青銅器を観察し、実測し、写真撮影した。北緯38度より北側にある京畿道全谷里遺跡を訪れ、米軍ヘリが頭上を旋回する中を、地上に石器が散布する様子を確認する。数年前に韓国では初めて発掘調査された前期旧石器時代遺跡で、杉原先生はその発掘調査の見学を希望する旨を韓国側に伝えたものの実現しなかったとのことで、前日から興奮気味だった。戦前の朝鮮総督府建物を利用した国立中央博物館では、韓国で遼寧式銅剣が初めて発見されたことから国宝になっている忠清南道松菊里遺跡の銅剣と有柄式磨製石剣を展示室から応接室に持ち出してもらって、じかに手に取って詳しく観察した。崇田大学校では、同大が誇る多数の青銅器コレクションを見学するとともに、慶尚南道大坪里遺跡で採集された弥生時代前期初頭併行の土器片を観察し拓本もとり、日本列島の弥生前期土器の外傾接合という技法が朝鮮半島に由来することを知って興奮した。高麗大学校では、杉原先生が土師器の源流だと考える慶尚南道熊川貝塚の土器群を実測。韓国中部の大田市から高速バスを使って日帰りで光州博物館を訪問して、済州島山地港遺跡で戦前に発見された小銅鏡の写真と拓本をとった。韓国の文化財を管理するソウルの国立文化財研究所からの連絡が光州博にうまく伝わっておらず、滞在時間が1時間しかないのに、どの資料が希望なのかと展示室で右往左往して時間を浪費してしまい、私が担当する拓本作成はわずか10数分しかなくなっていた。通常は資料に画仙紙を上からのせ、刷毛で水を打つのだが、それでは乾燥までに時間がかかりすぎる。そこで、杉原先生に「これで失敗したら許し

てください」と断ってから、携行した大型三角定規の上に画仙紙を置いて刷毛で水を打ち、脱脂綿と別の画仙紙で極力水分を抜いて、かすかに湿った状態の画仙紙を小銅鏡の上に乗せ、脱脂綿で押えるという方式を試みた。幸いなことに見込み通りの拓本が取れて、先生とともに喜び合った。慶州北方の迎日郡域にある支石墓群も見学して、その巨大さに驚嘆した。杉原先生は「将来は、ソウル大出身の李康承君と釜山大出身の申敬澈君が韓国の考古学界を牽引するはずだから」とお二人にもお目にかかることができた。それまで中国の考古学には多少の関心はあったものの、韓国・朝鮮半島にはそれほどでもなかった。この訪韓でいきなりその魅力にはまり、東アジア考古学を意識するきっかけとなった。実物<モノ>がもつ力であろう。

杉原先生が亡くなった5年後の1988年から2年連続で、真夏と冬に中国の新疆ウイグル自治区に1～2か月滞在する経験をした。のちに「沙漠博士」と呼ばれるようになる政経学部教授の小堀巖先生の海外科研「カナート水利システムの国際比較研究」で、新疆のトルファン郊外のカナート（坎井）の構造・掘削法、カナートを使う農業の実態を調査する農業水利研究である。明治大学考古学研究室から使い慣れたトランシット（三脚と小型スタッフ（箱尺））を携行して、トルファン郊外の五道林にある総延長2.5kmの坎井1本に72基ある縦井戸相互の距離と標高差、そして各縦井戸上面から地中水路の水面までの深さを測り、坎井の断面図を作成した。さらに、トルファン郊外のウイグル族の村々を訪問して、カナートを掘削した技術者から道具を見せてもらい掘削方法も詳細に聞き取り調査した。数日、東方のハミでも調査し、一日郊外の天山山脈を北に越えた。南側が著しい乾燥地帯なのに、北側は一変して緑豊かな草原地帯であるのを知った時、この草原は遊牧民の世界であり、東北アジアから西ヨーロッパに至る広大な文化世界を培ったことに思いをはせた。トルファン近郊ではウイグル族の人々の生活をじかに観察し、省都ウルムチではいわゆる民族問題の現実も所々に目にすることができた。

その3年後の1991年には、在外研究で、USA・イギリス・フランス・スウェーデン・ノルウェー・デンマーク・アイルランド・韓国を歴訪することができた。36歳になっていたが、明治大学の猛烈に忙しい日々を揉まれ、自分にこれから明大考古学を背負うことができるのかと悶々とする中で在外研究は、日常からの脱走だったが、一方で自分を見つめ直す格好の機会であった。日本を出発して数日後、ニューヨークのセントラルパークで空を見上げて「ああ、こうして青空を見上げるのはなんと久しぶりだろう」と思ったその一瞬は、今でも忘れない。東海岸の博物館を訪ね歩いて、北米考古学や、南アジアとアフリカの民族資料の面白さを知った。民族資料のなかでも石斧・貝斧は、着柄法がじつに多彩なことに気づいて50数点をスケッチした。イギリスでは、北方のオークニー諸島から東南端のランズエンドまで、各地の新石器～鉄器時代の遺跡を歩き回り、新石器～時代青銅器時代は集落遺跡がきわめて希薄なのに墳墓やモニュメント（記念物）は壮大であることに驚嘆し、宗教儀礼を重視する解釈法を知った。また、この在外研究期間中に、ニューヨークとロンドンの日本書店で買ったあらゆるジャンルの新書・文庫を読み込んで、文化世界の奥行きと広さを実感したのも有益だった。

こうして20～30代でわずか数度ではあったが、アジアや世界各地を味わう体験ができたことは、その後の学術思考の土台をつくる上で大きな刺戟となっている。

今や文字やメディアを通して世界のあらゆる情報を入手することが可能だが、しかし、ゆっくりと時間をかけてその文化を体感すること、実物をじっくり観察することは、自らの奥底を揺り動かし、それまでとは異なる次なる自分への道へと誘ってくれる。

いざ、前へ、フィールドへ、世界へ。そして大地に根をはろう。